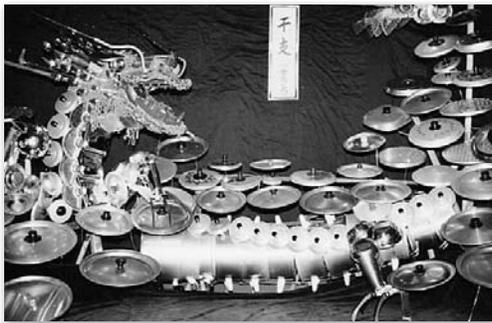
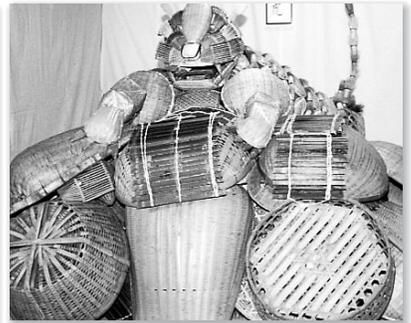




「蛸」漆器一式



「干支」金物一式



「明日をみるトラ」竹製品一式

「見る方も想像力を働かせて。作り手だけではだめ。双方の想像力があって初めて完成する。また、作り手の目線で眺めるのも一興。道具の使い方やつなぎ方にも苦心のあとが見えるはず」

(坂口)



「欄間の鷹」竹製品一式

■一式飾りの見所

「日常に使う生活用品で芸術作品を作るというところに面白味がある。」(堤)

一式飾りは、法勝寺1区〜8区の作り手が趣向を凝らして作ります。子どもの頃から一式飾りを見てきた堤一真さんと法勝寺一式飾り保存会の坂口允司会長にお話を伺いました。



堤 一真さん
法勝寺7区

■ルールを楽しむ

一式飾りは「制限の中の自由」を楽しむ粋な遊び。飾りに使う道具は切ったり穴を開けたりしてはいけない、ぼろした後、元の状態に戻らなくてはならないなど、いくつかのルールがあります。

「ああでもない、こうでもないと思像力をフル活用する。(道具が)びしゃーっとイメージどおりにはまった時はよしって思う」(堤)

「道具は各家庭から持ち寄ったり、旧家の蔵には一式飾り用に保管してあったりする。どの家庭にどんな道具があるのか皆が知っていて、それをもとに題材を決めることもあります」(坂口)



坂口 允司さん
法勝寺一式飾り保存会会長



「立美人桃山」漆器一式

■受け継がれる「粋」

法勝寺中学校では保存会の指導で一式飾りの制作を行っています。



「しゃちほこ」陶器一式(中学生の作品)

「中学生もやり始めるとすぐに夢中になる。少しアドバイスをする、試行錯誤して答えを出していく」(堤)

「未来につながるようで頼もしい」

今年も中学生の力作が展示されます。(坂口)

一斉に咲いて散る桜のように、たった二日間、法勝寺の町を彩る飾り物。楽しむと共に未来に伝えたい文化です。